

コンブをめぐる

日本では一般に、コンブ目コンブ科コンブ属に分類される寒流系の海藻を「コンブ」と呼び、「昆布」の漢字をあてる。コンブは北海道の特産というイメージが強いが、東北の太平洋側（青森・岩手・宮城の沿岸）にも分布している。ただし、江戸中期、寺島良安の『和漢三才図絵』（1712年成立の図入り百科事典）は、「蝦夷松前」のコンブは津軽や南部のコンブに比べ、「赤色にして味甚だ美にして最上」だとしている。北海道産コンブの上質さは古くから名高かったようだ。

このような北海道産コンブの「ブランド化」は、室町時代にもさかのぼる。14世紀成立の『庭訓往来』には、諸国の名産品のなかに「夷の鮭」と並んで「宇賀昆布」がみえる。「宇賀」は函館市付近の古い地名で^{※1}、現在もマコンブの主産地である。したがって「宇賀昆布」の実態は、道南の高級なマコンブであろう。こうした北海道産のコンブは、近世には琉球や中国にもおびただしい量が輸出され、本来、コンブの生息しないこれらの地域の食文化に深く根付いていった。

「昆布」の由来

さて、「昆布」の語は、古代中国の古典に由来する^{※2}。『三国志』にも登場する後漢末の伝説的な名医・華陀の弟子に魏の呉普（220～256）がいる。彼がまとめた『呉普本草』には、薬効ある海藻として「綸布、一名は昆布。」とあり、これが「昆布」の語の初見である。なお「綸布」については、すでに前漢成立の『爾雅』（中国最古の辞書）に、「綸」という海藻が「東海」の特産品としてあげられている^{※3}。

こうした「東海」の「昆布」の実態は、早くに牧野富太郎（1862～1957。植物分類学者）が指摘したように、ワカメであったと思われる。ここでの「東海」とは、朝鮮半島北東部の日本海沿岸のことで、後漢～三国時代には「濊」や「沃沮」とよばれる民族が居住していた。高句麗広開土王碑（414年立碑）には「東海賈」（東海の商人）という人々のことが書かれている^{※4}。このような人々が、日本海でとれるワカメを中国までもたらしていたようだ。

では、われわれの言うコンブは、いつごろ中国側に



認識されるのであろうか。11世紀に編さんされた北宋の『嘉祐本草』には、登州（山東半島）の特産品として、現代中国語でコンブを意味する「海带」が登場する。10～11世紀頃、中国東北部やロシア沿海州などには「女真」（ツングース系民族。1115年、「金」を建国）の勢力が勃興していた。彼らは海路、山東半島に至り、中国ともさかんに交易した。まだ不明な点も多いが、この時期の女真による縦横無尽の活動のなかで、コンブが中国への交易品に加わった可能性は高いと思われる。

古代日本のコンブ流通とエミシ・アイヌ

次に、古代日本での「昆布」の登場をみてみよう。養老2年（718）に編さんされた養老令には、調（税）の一種として海藻類についての規程がある（「賦役令」調絹絁条）。ここにはコンブに該当する藻類がみえない。このことは、奈良時代初期には、まだコンブは国家領域より北の「蝦夷」（エミシ）^{※5}の世界から入手される交易品であり、税制に定着していなかったことをうかがわせる。

※1 『函館市史』

※2 アイヌ語の「コンブ」がコンブの語源とする説も根強いが、おそらく成立しない。知里真志保『分類アイヌ語辞典』は「マコンブ」の項に「kompu」「コンブ」（幌別・沙流）と「sas」「さシ」（北海道中北東部、樺太、千島）をあげている。「サシ」が本来のアイヌ語であったが、本州から外来語「コンブ」が流入して道南中心に「コンブ」の語が広まり、その他の地域に「サシ」が残存したとみるのが整合的な解釈だろう。

※3 大石圭一『昆布の道』（第一書房、1987年）、安井邦彦「「昆布」のルーツ」（『生活衛生』54(2)、2010年）など参照。

※4 武田幸男『高句麗史と東アジア』（岩波書店、1989年）。

※5 日本古代の支配者たちは、古代東北やその周辺（北海道の一部を含む）の人々を「蝦夷」（エミシ）と呼んで区別・差別した。エミシとアイヌの関係について定説はないが、少なくとも「エミシ」にはアイヌの祖先集団の一部が含まれたと考えられている。

古代交流史

蓑島 栄紀 (みのしま ひでき)

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

1972年横浜市生まれ。2000年、國學院大學大学院日本史学専攻博士後期課程修了。博士（歴史学）。苫小牧駒澤大学に教員として勤務ののち、2014年から現職。著書に『ものと交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）、『古代国家と北方社会』（吉川弘文館、2001年）、編著に『アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承』（勉誠出版、2011年）、共著に『岩波講座日本歴史第20巻 地域論』（岩波書店、2014年）などがある。研究分野は古代の北海道・アイヌと日本・東アジアの相互関係の歴史。

この問題を考えるうえで重要なのが、『続日本紀』
霊亀元年（715）10月の記事である。これによれば、
「^{へいむら}閑村」（岩手県宮古市周辺）のエミシ^{すがのみみ}の族長「須賀君
古麻比留^{こまひる}」らは、「先祖以来」^{くわいけ}「昆布」を陸奥国府（仙
台市郡山遺跡か）に献上していたが、道のりが遠く、
辛く苦しいことを訴え、地元の閑村に「郡家」（貢納
拠点）の設置を申請して許可されたという。この地域
はコンブの分布の南限にあたっており、これらの「昆
布」は当然、地元三陸産のコンブを含んだであろう。

ただし、考古学の成果によれば、当時の太平洋沿岸
では、エミシたちが南北との活発な海上交流をおこ
なっており、閑村はその要衝であった^{※6}。8世紀頃、
函館市を含む渡島半島東南岸には、本州系の土器
（土師器^{はじき}）や竪穴式住居を有する遺跡が点々と出現し、
本州との人・もの・情報のネットワークが道南につな
がっていたことを推測させる。このことから私は、
715年の「閑村の昆布」の実態には、のちに「宇賀昆布」
として知られる道南のマコンブが含まれた蓋然性が高

いと考えている^{※7}。

先述のように、「昆布」の語は古代中国でワカメを
意味し、日本でもはじめは同様だった^{※8}。藤原宮出土
の木簡などからみて、日本では当初、コンブを「ヒロメ」
ないし「エビスメ」と呼んでいたらしい。ところが、
715年における「閑村の昆布」の記録の直後、720～
730年代になると、日本社会ではコンブの意味での「昆
布」の語が急速に普及するようになる。

その一例をみてみよう。近年、陸奥国
から平城京へ送られた「昆布」の荷札木
簡が、赤外線によって解読されている^{※9}。

「陸奥国名取郡□□（昆カ）布贄巻籠
天平元年十一月十五日」

天平元年は729年。「昆布」の上の一字
は「細」「広」「索」など、コンブの種別
を表す文字であろうか。名取郡（宮城県
名取市や仙台市の一部）にはコンブが分
布しないので、もっと北の地域から交易
で入手し、京に送ったものと思われる。
現時点で日本最古級の「昆布」の事例で
ある。

以上をまとめると、715年の「昆布」
献上をめぐる一件は、日本社会が北方産
のコンブを恒常的に入手するための転換
点となった可能性が高い。これ以後、日
本ではコンブの供給量が増大し、中国や
朝鮮半島とは異なり、「昆布」という字
がこの海藻を意味するものとして定着するのだろう。
その背景として、質・量にすぐれる道南のマコンブが
交易品に加わっていた可能性もある。古代日本におい
て、コンブは天皇・貴族や僧侶などの珍重する高級食
材であった。コンブや動物の毛皮、ワシ羽などを交易
することで、北海道の人々は鉄や繊維製品・米などを
入手した。コンブ交易は、古代北海道の経済・社会に
大きな影響を与え、本州との文化交流の機会にもなっ
た。コンブは古くからアイヌと日本や中国など他地域
とを結びつける重要な役割を果たしたのである。



※6 樋口知志『阿豆流為（あてるい）』（ミネルヴァ書房、2013年）

※7 蓑島栄紀『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）

※8 古代日本ではワカメを「海藻」または「軍布（ぐんぷ）」と表記した。「海藻」の語は律令にも登場し、より公的な用法だったらしい。一方、「昆布」と音通と思われる「軍布」は、西日本の木簡に多くみられる。

※9 平城宮第39次調査・SD4951出土・平城宮3-3059号木簡（奈良文化財研究所木簡データベース参照）